

2015年11月29日 MJCC 主日礼拝メッセージ 柏倉秀吉師

聖書：Iコリント16：1-9

タイトル：『献金と宣教』

---

Iコリント16：1-9

「献金」と「宣教」について共に考えて行きたい。

この手紙は著者パウロによって記された手紙である。彼はこれまでエペソ、ガラテヤなどのアジア地域、そしてコリント、ギリシャなどのアカヤ地域に都合3回の伝道旅行を行った。この手紙は、その伝道旅行の中で記された手紙である。

彼が手紙を記した理由は、コリントの教会が初めの霊的祝福から外れ、幾つもの非常に大きな問題が出てきていたため、コリント教会の生みの親でもあるパウロが、そうした諸問題について、きちんとした答えを彼らに提示する必要があるためである。内容としては非常に厳しいものでもあった。パウロは、こうしたコリントの教会の現状を旅先で知り、この手紙を記しているわけだが、何より彼の本心というのが、7vに感じられる。

「16:7 私は、いま旅の途中に、あなたがたの顔を見たいと思っているのではありません。主がお許しになるなら、あなたがたのところにしばらく滞在したいと願っています。」

彼は単に、『解決策を手紙で記して送ればよい!』というのではなく、

「主がお許しになるなら、しばらく滞在したいんだ!」という、パウロのコリント教会の人々に対する溢れる愛が示されているのである。

しかし、状況としては、8vを見ると

「16:8 しかし、五旬節まではエペソに滞在するつもりです。」とある。

つまりこの時パウロは「エペソ」にいたのである。しかも「五旬節まではエペソにいる。」と記している。

五旬節とは、ペンテコステの時である。暦では夏の始まりの時期である。さらに6vを見ると

「・・・冬を越すことになるかもしれません・・・」と記されている。つまり、彼が手紙を記している時期とは、「冬の前」ということである。おそらく秋頃だろう。とすれば、パウロは『この秋から次の年の五旬節である夏の始まりまでの少なくとも半年間は、今いるエペソに滞在しています。』と記しているのである。

本来なら「主がお許しになるならしばらく滞在したい!」とまで願っていたパウロだが、どうしてもエペソに留まらなければならない理由があったのである。9v。

「16:9 というのは、働きのための広い門が私のために開かれており、反対者も大ぜいいるからです。」

つまり今滞在しているエペソでは、『働きのための広い門が開かれているため、そちらには行けない。』ということである。

パウロはここで、「働きのための広い門が私のために開かれている」と記している。すなわち彼は自分を通して語るべき人々が周りにはたくさんいる!ということを実感していたのである。

私達はパウロのように実感しているだろうか? 私達もこのように実感する必要があるだろう。

さらにこの箇所から教えられるのは、いわゆる「宣教」とは、必ずしもすべての条件が整っているような、そういった好条件のもとで為されているのではないということである。福音を語れば誰でもすぐにキリストを受け入れ救われていく・・・ということではない。

それが9v b「・・・反対者も大勢いるからです」ということである。

別の意味ではパウロの宣教とは、「反対者が大勢」起きてくるようなそういった宣教でもあったということである。それほどの宣教を彼は行ったのである。そしてこの時の出来事が使徒19：1、8－10に記されている。

「19:1 アポロがコリントにいた間に、パウロは奥地を通過してエペソに来た。そして幾人かの弟子に出会って・・・」

「19:8-10 それから、パウロは会堂に入って、三か月の間大胆に語り、神の国について論じて、彼らを説得しようと努めた。しかし、ある者たちが心をかたくなにして聞き入れず、会衆の前で、この道をののしったので、パウロは彼らから身を引き、弟子たちをも退かせて、毎日ツラノの講堂で論じた。これが二年の間続いたので、アジヤに住む者はみな、ユダヤ人もギリシヤ人も主のことばを聞いた。」

すなわち、反対者が大勢いる中でも彼らが宣教することをあきらめなかったので、「アジヤに住む者はみな、ユダヤ人もギリシヤ人も主のことばを聞いた。」という、素晴らしい宣教の御業がなされたのである。

そしてこの努力により、あの黙示録に記されている7つの教会がこのとき誕生したのである！（黙示録1：11「その声はこう言った。「あなたの見ることを巻き物にしるして、七つの教会、すなわち、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤに送りなさい。」）

宣教とは、そうした反対者が大勢いるという中であっても、拓げられていくものであり、また拓げられていくべきものである。

『福音の種をまいても、目を出さないのではとはやめた。』というのではない。間もなくクリスマスである。福音を伝え、教会に導くにはこれ以上ない良い時期である。私達はたとえ反対者が起こされたとしても、恐れずに宣教の種まきをしていきたいと願わされるのである。これが「宣教」ということである。

さて次に、(前に戻ることになるが)「献金」についてである。

パウロがコリント教会の人々と会うことが出来たのは、エルサレムへ「献金」を届けるということのために、コリント教会の「献金」を預かりに行くということで、再会が実現したのである。

3－4 v 「16:3-4 私がそちらに行ったとき、あなたがたの承認を得た人々に手紙を持たせて派遣し、あなたがたの献金をエルサレムに届けさせましょう。しかし、もし私も行くほうがよければ、彼らは、私といっしょに行くことになるでしょう。」

この様に記したパウロが、実際に「献金」を預かりに訪れたのである。

さて、この「献金」は、エルサレムのキリスト者たちを助けるためのものである。当時、エルサレム教会では飢餓や迫害、また様々な試練があり、非常に窮乏していたのである。それでパウロは、コリントの教会だけにとどまらず、地中海地域の諸教会すべてに、この献金の必要について、語り、集めていたことがロマ15：25－28から確認できる。

「15:25-28 ですが、今は、聖徒たちに奉仕するためにエルサレムへ行こうとしています。それは、マケドニヤとアカヤでは、喜んでエルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために醸金することにしたからです。彼らは確かに喜んでそれをしたのですが、同時にまた、その人々に対してはその義務があるのです。異邦人は霊的なことでは、その人々からもらいものをしたのですから、物質的な物をもって彼らに奉仕すべきです。それで、私はこのことを済ませ、彼らにこの実を確かに渡してから、あなたがたのところを通過してイスパニヤに行くことにします。」

パウロは、このようにして諸教会から「献金」を集めたのである。

再びIコリント16：1に戻るが、彼はここで「献金」ということに関して、非常に大切な原則を記している。

その一つは、「献金とは聖徒たちのため」ということである。

ここではエルサレムのクリスチャン、すなわちユダヤ人クリスチャンへの献金として集められていたわけだが、それは同じ民族ではない異邦人クリスチャンが、ユダヤ人クリスチャンへ献金するという事を通して、全ての聖徒の必要を満たすために献金とはささげられるものである。ということを示している。

言い換えれば、『自分たち、または自分たちの教会が良ければそれでよい』ということではない。それは全世界的に、この地上にあるキリストの御身体である教会とその聖徒たちが互いに必要を補い合い、満たされていくを通して神の栄光を表し、また、この世の人々がそうしたキリスト者の愛の業を見て、『確かにキリスト者の交わりには神がおられる！』ということを知ることにもなるのである。「献金」にはそういった神の栄光を表す素晴らしい働きがある。

私達は、この「献金」を通してすべての聖徒たちを助けることによって、全世界的な教会、すなわちキリストの御身体そのものに仕える働きをしているのである。それが献金の第一の原則といえるだろう。

次に16：2には第二の原則が記されている。

「16:2 私がそちらに行ってから献金を集めるようなことがないように、あなたがたはおのおの、いつも週の初めの日に、収入に応じて、手もとにそれをたくわえておきなさい。」

ここに「週の初めの日に」とある。すなわち「週の初めの日＝主日礼拝」のことである。ここに「献金」とは「主日礼拝」にささげられるべきものである。と明確に記されている。すなわち第二の原則とは「献金とは礼拝の一部である」ということである。

そもそも礼拝とは捧げることだが、そのことがロマ12：1に記されている。

「12:1 そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」

すなわち自分自身を捧げる事です。ユダヤ人が小羊を捧げるときは、その捧げものについて決して傷がつかないように細心の注意し、大事に育てた小羊を捧げたのである。そのために彼らは、にわかにはなく、日々自分の時間も労力も資金も犠牲にしたのである。

つまり、礼拝を捧げるとは、そのように犠牲が伴っているのである。もちろん犠牲には痛みが伴う。ゆえに礼拝を捧げているのに、何の犠牲も痛みもない礼拝というのは、『本当に礼拝を捧げているのだろうか？』と問う必要もあるのではないだろうか。

「献金」とは自分たちの資金を削るのであるから、確かに大きな犠牲であり、痛みが伴う。このようにして、この「献金」が犠牲と痛みを伴った捧げものであるということにおいても「礼拝の一部である」と言える。さらに「献金」とは、神への「献身」であるとも言える。神に自らを犠牲にし、捧げるのはまさに「献身」だからである。

さて、2 v bには「収入に応じて」とある。

これは各人によってその捧げるモノ（額）が違うということだが、それは決して強制させられて行うのではない！ということである。すなわち自発性が伴っているのである。さらに、この「献金」には規則性が

求められている。2 v 「そちらに行ってから集めることが無いように・・・」とある。

「献金」は、したりしなかつたりというのではなく、生徒たちの必要のために、礼拝の中で自発的に、そして規則性を持って捧げられなければならないものである。それが、この「献金」なのである。

私たちは、この献金ということをおして、神に自らを捧げ、献身し、そして生徒たちの必要を満たすことによって、さらに反対者がおこされてもお宣教することによって、神に仕えているということを確認し、また感謝し、そして更なる成長、聖化への歩みをさせていただきたいと願わされる。

最後に使徒 20:34-35 の御言葉を確認したい。

「20:34-35 あなたがた自身が知っているとおり、この両手は、私の必要のためにも、私とともにいる人たちのためにも、働いて来ました。

このように労苦して弱い者を助けなければならないこと、また、主イエスご自身が、『受けるよりも与えるほうが幸いである』と言われたみことばを思い出すべきことを、私は、万事につけ、あなたがたに示して来たのです。」